

私と私の活動について

ダニエラ・ハダシー

(日本パペットセラピー学会名誉会員)

私について

私はドラマセラピストであり、人形（以下、パペット）を使ったプロの腹話術師です。病院や治療現場での仕事は、唯一無二のものです。

私は腹話術で使用する9体の治療用パペットを持っています。そのパペットたちを用いることによって、患者に信頼感を与えることができるのです。9体の中でも、最もプロフェッショナルなパペットたちは、マリヤ・ゴレヴィッチが作ったものです。



マリヤは、顔と体に傷があり病院のパジャマを着ている犬の男の子のチョコを作りました。チョコは、小児科病棟や外科病棟で使用するためにデザインされています。クマに似たドゥドゥは、臓器移植を受けた子ども向けで、点滴、傷跡、包帯、そのような子どもたちに使用される医療器具を付けています。ジェロは注意障害に苦しむ男の子のエルフ（妖精）で、同じような問題を抱える青少年や小児病棟の患者向けにデザインされています。ガイアは10代の拒食症の少女で、主に神経性食欲不振症に苦しむ10代の少女を対象としています。ラキアは黒い肌と大きな目が特徴の、エチオピア人のティーンエイジャーのリクエストに応じて作られた人形です。自分と同じ肌の色をしたラキアと私が彼女に会いに行った時、彼女は信じられないといった表情で迎えてくれました。

これらは、ドラマセラピストとしての私の仕事のために作られたキャラクターの一部です。これらのキャラクターを使うことによって、私は患者との信頼関係を築くことができます。

私がパフォーマーとして使ってきた古いキャラクターも新しいキャラクターも、そしてキャラクターたちそれぞれの声も、治療の分野における役割を担うことで、新たな命を与えられています。

腹話術のパペットたちは、子どもたちが心を開き、コミュニケーションをとり、サポートされることを可能にしてくれます。子どもたちがパペットと話す際には、病気や困難といった問題に関して一対一で話すときに起きる防御機能を作動させる必要がなくなるのです。

腹話術は伝統的で神秘的な現象として始まりました。そして何百年もの間、腹話術は神の声を話すことによる魔術的な予言の力、あるいは霊媒師の声を通して死者の声を伝えるある種の憑依だと考えられてきたのです。近代になると、腹話術は徐々に演劇や娯楽に関連する芸術のひとつへと進化していきました。この変化は、文化や近代心理学的思考によって、腹話術をユニークな芸術として活用することを可能にしたのです。腹話術は、媒体から俳優・パフォーマーへと進化してきました。

パペットはセラピストにとって“最前線”に立ってくれる存在です。セラピストと患者の双方が対話することを助け、治療の手段やニーズを確認することをサポートしてくれます。子どもはパペットと出会い、対話を積み重ねます。治療の「道具箱」を代表して、パペットとその術者がその対話の深さを決定するのです。この特別な分野では、パペットとその術者との双対関係に驚くべき力が存在しているのです。

パペットたちは病院における効果的な治療ツールとして、通常の方法では対話が困難な患者にも働きかけることができます。パペットを観察することで、患者は入院の原因となったトラウマに対して、新しい持続可能な関わり方を学ぶことができます。ただ、病院で働くセラピストで、腹話術を治療に用いたいと考えている人は、最も専門的な訓練を受けるべきです。

私のパペットたちの現状は： チコとドウドウは手術後のパジャマ姿で点滴を受けながら小児科病棟にいます。暴力的なエルフの男の子タキは、感情を爆発させてしまい、精神科病棟に入っています。エチオピア人の少女ラキアは肌の色など、他と異なることを象徴しています。別の惑星から来たジニは、他の木製の人形たちと同じように歯をガタガタ鳴らしています。彼らは皆、私の中に居場所を持っていて、私は彼らのキャラクター、声、考えを私の中にいつも保管しています。舞台役者は芝居が終わるとその役を演じるのをやめてしまいましたが、セラピストとして治療に当たっている腹話術師は、生涯そのキャラクターたちと共に生きているのです。



現在、私はイスラエルのシュナイダー病院の腫瘍科で、治療や移植を受ける子どもたちのために働いています。ヒレル・ヤッフェ病院でも働いています。以前は、ナハリヤ病院の研修部と精神科で働いていました。ここ数年は、パペットを使って子どもたちにさまざまな医療処置を行う準備をしてきました。テルハショメル病院の血友病病棟では、パペットを用いての特別治療プロジェクトとして、子どもたちに注射の仕方を教えてきました。また、糖尿病や成長ホルモンを必要とする子どもたちを対象としたプロジェクトもありました。教育者、心理士、医師、セラピスト、ソーシャルワーカー、ハイテク企業、宗教団体などを対象とする講演もしています。

2014年、私は小児外科部長のスウェード博士との共同研究プロジェクトを主導しました。研究はナハリヤ病院で4年間にわたって行われました。「トラウマを経験し小児外科病棟に入院し



ている子どもたちの間で、治療的腹話術を使用することによる生理学的および行動学的効果」についての研究でした。その結果は印象的で、さまざまな学会で発表されました。

私はイスラエルからケニア、エチオピア、インドの病院に派遣されたこともあります。日本には津波の後に派遣されました。アメリカやイギリスでも講演をしたことがあります。私は英語とフランス語を話せますが、人形たちは日本語、スワヒリ語、ヒンディー語、アムハラ語、アラビア語、ロシア語も少し話します。

腹話術仲間の皆さん、こんにちは

2003年にラスベガスで開催された学会に参加したときにお会いした方もいらっしゃいますし、入院している子どもたちとの関わりを始めたころのことを詳しく書いた雑誌の記事で私のことをご存知の方もいらっしゃるかもしれません。この10年間、私はこの分野を自分の仕事とし、現在はテルアビブのシュナイダー小児医療センターの教育・治療チームの一員となっています。私の知る限り、病院に雇用されている治療的腹話術師／演劇療法士は世界中で私だけです。私の仕事は、適切なパペットを持参して子どもたちのベッドサイドを訪問し、医療スタッフの要望や子どもたち一人ひとりのニーズに応じて、病気や入院に関連するさまざまな問題に対処する手助けをすることです。

私の患者の中には、がんなど命にかかわる病気にかかっている子どももいますし、臓器移植を受けている子どももいます。私は彼らに、苦痛や恐怖、不安、孤独といった同じような感情を経験している新しい友人としてパペットに出会ってもらいます。患者と一緒に過ごす1時間の間に、笑顔で彼らに接し、彼らの思いに寄り添ってくれる友人を連れてくることで、その苦痛や不安を少しでも和らげようとしているのです。

私は自分の仕事についてイスラエル全土で講演し、腹話術を使ったトラウマ・セラピーの専門家として、他国からも招かれ、イスラエルの外務省から派遣されて行ってきました。

劇場や舞台の世界から治療的腹話術の分野への私の旅については、世界中を旅して得た知識や経験を洞察とともに記録する必要があると今確信しています。以下は、現在執筆中の本からの抜粋です。本が出版される前に、皆様からの反応やご批判をお聞かせいただければ幸いです。

よろしくお願ひします。ダニエラ・ハダシー danielah47@gmail.com

2014年、序文、謎の病気、そして執筆の決意...

ここ数週間、咳が止まらない。何度かかかりつけの医者に診てもらったが、毎回同じことの繰り返しだった。肺の音を聞いて、「おそらくウイルス性のものだろう.....そのうち治るだろう.....」と言われたが、あの嫌な咳はなかなか治らない。疲れを感じ、気力もなくなっている。病院での仕事では、特に感染に注意が必要な患者には面会しないようお願いしている。

シュナイダー小児医療センターの私が勤務する病棟では、今日もいつものように、医師は朝の“回診”を終えた上で、さまざまな“アート”セラピストを、それぞれが最も必要とされていると考える病室に向かわせる。私は6号室に送られ、カラフルで変わったショッピングカートのようなカートを持ってそこに向かった。6号室で私は、複雑な首の手術を受けた6歳の少女、ミハエルに会った。

ミハエルは私の“チョコ”にとっても慣れていて、1分もしないうちに彼と熱心に会話をしている。数分後、ミハエルの母親は部屋を出て行き、私は突然、サージカルマスクの中で咳き込み始めた。チョコはミハエルを見て、彼女もミハエルを見ている.....私の咳はさらに強くなり、息が苦しくなった.....あと1分もすれば、この子の前で窒息してしまう！幸運なことに、彼女は私の苦しさに気づいていない。彼女はチョコと独白を続けていて、私はひと呼吸ひと呼吸と闘いながら、患者を怖がらせないように、どうにかチョコの頭を動かして「コミュニケーション」をとっていた。

廊下に目をやると、看護師たちが急ぎ足で行き来している光景が私を少し落ち着かせた。もし私が失神しても、誰かが助けてくれる。しかしその間、私は椅子に座ったまま、立ち上がることができない。咳は完全に私の声を奪い、酸素もない。恐怖の数分後、チョコのうめき声と適切な別れの手の動きで、私はどうにかミハエルと別れた。数回苦しい呼吸をした後、私はなんとか椅子から身を起こし、チョコをバッグに入れ、疲れ果ててナースステーションに向かった。

私は看護師長に今経験したことを話した。彼女は私を椅子に座らせ、医師が診察に来るまで動かないよう約束させた。オーレン教授が部屋に入ってきて、私は喉が詰まるような感覚と何ヶ月も続く咳について説明した。「あなたは百日咳です。すぐに家に帰りなさい。」私は彼女の言うとおりにした。自分と家族のための抗生物質をもらい、数週間は安静にしているようにとの指示を受けた。後日、その日起こったことについて思い返していた時、ミハエルとのミーティングで私の代弁者となって黙って「かばって」くれたチョコに感謝した。私はこのことについて書かなければならないと思った。



2012年、シュナイダー小児医療センター、テルアビブ、イスラエル

ある日、私は腫瘍科に行くよう頼まれ、そこで骨髄移植前の長期入院中だった7歳のトムを診察した。トムは複雑な遺伝病を患っており、移植は生存のための最後のチャンスだった。彼の健康状態の悪化は突然で、発症から2ヵ月も経たないうちに、脳のプロセスが切断され、認知機能に障害が出始めた。入院初期、まだ視力が残っていた頃、チョコと私は彼を見舞った。現在彼はもうチョコを本当に見ることはできないが、その声に耳を傾けていることがわかった。やっ！他の子が彼に話しかけているのだ！彼は微笑んだ。

チョコはトムが視力を失ったことを思い出して言った、「僕もよく見えないんだ……」。私はトムにチョコを手で探らせた。トムは友達が戻ってきたことに感激していた。私はトムに手袋人形を試してみるよう勧めると、彼はそれを動かす、その人形に声を与え（おそらく私の声のようなものだろう…）、やがて対話が生まれた。トムは生き生きとおしゃべりをし、色や数字の話をし、突然、地表の奥深くにある溶岩の話やアメジストの話をし始め、この年頃の子どもには珍しい話題で盛り上がった。トムは友達のチョコが部屋にいることに興奮していた。30分間、トムはチョコと一緒にいて、おしゃべりをし、笑い、触れ合い、ベッドに飛び乗る。そして翌週また会うことになったが、その話が出たとたん、トムは黙り込み、表情は活気を失ってしまった。彼の友人チョコが去ろうとしているからだ。私はトムの気持ちを思い、胸が張り裂けそうになった。

私は部屋を出て、ホールで同科の主任医師と看護師に会った。彼らはトムの部屋のドアの小窓から様子を見ていた。トムは珍しい病気で重病を患っており、ここのあるところスタッフとの意思疎通がうまくいっていなかったようだ。医師は、次はいつトムに会うのかと尋ね、1週間後と聞いて驚き、がっかりした。「私は病院から3時間のところに住んでいます。週に2日のみの勤務で、その2日は家族と離れて働いているのです。」と説明しながら、私はこれでは十分ではないことに気づいた……。決して十分ではない。

腹話術療法の理論的背景

私が子どもの病室に入るとき、状況を理解するのに1分ほどかかる。患者のベッド（あるいはその隣）に座るまでに、私がそこで見ているもの、感じていることを、パペットがその子どもと会話するために使う言葉に「翻訳」していく。その子が感じていること、痛み、苛立ち、恐怖をパペットが共感できるように。私はその子どもの注意が彼らの痛みから新しい「ともだち」に向かうように、彼らの小さな肩にのしかかっている重荷をほんの一瞬でも忘れて、笑いやジョークに向けられるようにしたいのだ。

絵の才能がある人は芸術家になることを目指すだろうし、文章が上手な人は作家を目指すかもしれない。そして腹話術師は、たいていの場合、何らかの舞台に立って楽しませることを目的とするだろう。実際のところ、振り返ってみると、私が舞台で人を楽しませていたときでさえ、笑いのためではなく、何か社会的メッセージや教育の問題のために私はそこに立っていた。セラピーの道に移行し、命にかかわる状況に対応するようになったことは、たまたま私が持っていた珍しい能力に本当の意味と意義を与えてくれたのだった。



演劇療法を用いた治療的腹話術は、ホスピタル・クラウンや演技の世界を思い起こさせる。腹話術とパペットの統合は、ユーモアと即時的なコミュニケーションを誘い、高強度の治療介入へと結実する。それぞれの出会いはユニークであり、その進行と結果に関する保証はない。試行錯

誤の連続である。私の最もエキサイティングな経験は、治療セッションの中で起こる驚きであり、そのセッションはパペットを通して語られる私の声や言葉と、患者の反応との響き合いである。

腹話術療法の背景

「セラピストの仕事の主要な部分は、不可能な感情的問題を可能なものに変えることであり、そのプロセスにはセラピストが『患者よりも少し恐れずにいることが必要である』」とオグデン (Ogden, 1992) は主張している。

子どもの入院、特に命にかかわる状況は、子どもにとっても家族にとっても、「不可能」な状況である。その難しさを否定することも、それに屈することもなく、入院期間の不安にうまく対処する、さまざまな養育者が必要である。(Cohen Mannarino & Deblinger, 2006)

介護チームは、彼らが直面するチャレンジに気落ちさせられる。病院で働くことの影響のひとつに、不安や無気力、そしてより極端な二次的トラウマや燃え尽き症候群 (Figley, 1995) の発症があり、特に重病の小児を相手にする場合はなおさらである。(Regher, Hemsworth, Leslie & Howe, 2004)

ドラマセラピーとパペットの腹話術を組み合わせることで、こうした現象に対処できるユニークな可能性がある。腹話術の特徴は、伝統的な人間の行動から、より想像的で超現実的、大胆な領域へと逸脱できることである。腹話術はしばしば、腹話術師の自己の延長であり、感情的な問題をより切迫した形で表現することができる。これは、腹話術師が社会規範に従って行動する人物を表現するのに対して、パペットはより原始的で生々しい要素を使うということを、対話の中で達成できてしまう。このようにして、腹話術師とパペットの対話の中で、感情的な葛藤が外在化され、表面化される。実際、パペットは腹話術師よりも正確な内なる真実を表現している (Dessa-Massa, 2004)。

実際、パペットを特徴づける基本的な超現実主義は、パペットの姿に自由を与え、その封じ込めの範囲を広げることで、極限的な状況に対処することを可能にする。パペットの大胆さは子どもに力を与え、極限状況に対処する上でより強く、より勇気を与えるのである。



2003年、アメリカ

ラスベガスで開催された国際腹話術大会で、開会挨拶をするようにと招待され、友人のエイダと共に参加した。そこでどんな良いことが私を待っているのかを知らずに。巨大な会場には世界中から腹話術師が集まり、アメリカの主要テレビ局や海外のテレビ局のクルーも大勢いた。私は挨拶を辞退したいところだったが、気を取り直し、障害者リハビリセンターでの治療腹話術師としての仕事について話し始めた。私の才能をステージ上のパフォーマーとしてではなく、治療の分野で生かすという選択に、観衆の間に関心の波紋が広がっているのを感じた。

その後数日間の大会の中で、私は周囲の才能に圧倒された。熟練した腹話術師、芸術的なパフォーマー、才能豊かな人形遣いたち。世界中から集まった仲間にもまれて、そして私は初めて、自分の変わった職業選択について孤独を感じなくなった。仕事でのエピソードを披露する機会も何度かあり、好意的なフィードバックが返ってきた。自分は正しいキャリア選択をしたのだという自信に満たされて、私はラスベガスを後にした。

2007年、日本

ラスベガスのコンベンションから4年が過ぎたが、私はそこで出会った日本の腹話術師、池田武志さんと奥さんの周さんと連絡を取り続けていた。武志さんは、ADHDの子どもたちやダウン症の幼児たちの治療を専門とする小児神経科医で、パペットを使った治療をされている原美智子教授を私に紹介してくれた。原教授はまた、特別な支援を必要とする子どもたちにパペット療法を行う教育者やセラピストを会員とする日本パペットセラピー学会を設立されていた。彼女の招



きで、私はJPTA（日本パペットセラピー学会）の第1回大会のメインスピーカーを務めるために来日し、病院や特別支援学級の子どものたちに対する腹話術療法士としての経験を分かち合った。実は、私がテルアビブ大学で演劇を学んでいたときに、日本文化に触れ、能や歌舞伎、文楽について学んでいた。振り返ってみると、その時学んだことが、日本の人たちと接するときに生かされて、日本文化に対する垣根を取り払ってくれたように思う。また、池田氏に招待され、マロリー・ルイスのような国際的に有名なパフォーマーたちとともに、日本腹話術師協会（JVA）でも話をした。そこでは他の3人の治療腹話術師に出会うことができ、感激した。

翌年、私は再び日本に招かれ、JPTAでの講演とワークショップを行った。このときまでに、原教授と私は個人的に親しい関係を築くことができていた。大会後、私は彼女と一緒に東京近郊の群馬大学医学部附属病院に行き、血液内科の医師たちに会った。私の日本語のボキャブラリーは3単語しかなく、さらに訪問にただけの人が、実際に仕事をするには認められていないという日本社会で、誰も私がそこでセラピーセッションを行うとは思ってはいなかっただろうが、私は我慢できなかった！結局のところ、子どもは世界のどこにいても子どもであり、痛みや病気を抱えた子どもたちの世界は私にとってとても身近なものなので、私はすっかりくつろいでしま

った。もちろん、それがパペットたちと一緒に働く秘密なのだ。病院のパジャマに身を包み、腕には点滴をつなぎ、手首には病院の ID タグをつけているチョコを引っ張り出すと、案の定、チョコは彼らの友だちになった！チョコは、明らかに誰ともコミュニケーションのとれていない、車椅子に乗った 11 歳の少年に向かい、日本語を交えながらちんぷんかんぷんな言葉で話しかけ始めた。

少年はチョコをしばらく観察した後、微笑んで日本語で答えた。チョコは病院のパジャマや点滴を指さしながら、ちんぷんかんぷんなおしゃべりを続け、少年は笑いながら、チョコが日本語をうまく話せないことを看護師に告げた！それまで懐疑的な表情を浮かべていた看護師や医師たちも、私にクラスの子どもたち全員と交流してくれるように頼んでくれた（日本の病院でもイスラエルの病院と同じように、長期入院している子どもたちには教育セッションがある）、さらに病室に入って寝たきりの子どもたちとも話をするように促された。

患者の一人で、毛糸の帽子をかぶった白血病の 12 歳の少女は、チョコの一挙手一投足を目で追っていた。彼女はチョコの点滴、傷だらけの顔、パジャマを調べ、彼のおかしな話し方に笑った。突然、彼女はチョコの頭から数本の毛を一本ずつ引きちぎり始めた。看護師たちは彼女を止めようとしたが、私は続けるように指示した。彼女は 5 本の毛を引き抜き、チョコの手の中に置いた。明らかに彼女は自分の髪を失ったことに腹を立てており、チョコにも同じ思いをさせたかったのだろう。一般的に、子どもたちが人形を叩いたり、怒りを表現したりすることは私にとって何の問題もない。



群馬大学医学部附属病院で、私は腹話術やパペットがちんぷんかんぷんな言葉を話すことで、言語やコミュニケーションにおけるあらゆる障害を越えてしまうことを実感した。原教授は、学会での私の講演も喜んでくださったが、特に病院での私のこの活動を喜んでくださった。

2010 年、エチオピアとケニア

電話が鳴り出してみると、教育に携わるパペット使いの友人からで、外務省（科学文化局）の特使として一緒にエチオピアとケニアに行かないかという誘いであった。この訪問の目的は、教育および医療スタッフ（心理士、看護師、医師）に、感情療法にパペットを取り入れるための講義と訓練を行うことであった。

満員の聴衆の前に立ち、腹話術・演劇セラピストとしての私の仕事について説明すると、聴衆が魅了されているのを感じた。しかし、私がパペットを取り出し、「パペットを通して」話し始めた瞬間、聴衆から驚くべき、そして恐ろしい反応さえ返ってきた。「あなたはシャーマンだ。魔女か聖霊のどちらかだ。」シャーマンと呼ばれたのはこれが初めてだったが、これが最後ではないだろう。

中世の何百年もの間、「口寄せや降霊術」は、神秘的なものさえみなされ、神的、悪魔的、異世界的なメッセージを声に出す一種の予言的能力であった。腹話術師はディブク（ユダヤの伝説に登場する悪霊で、生きた人間の肉体を乗っ取り、コントロールするとされている）に操られているとみなされ、「シャーマン」のレッテルを貼られてきた。現代では、主に心理学的思考と科学への理解が進んだおかげで、文化的認識は腹話術を芸術として受け入れている。しかしアフリカでは、芸術や演劇としての腹話術に触れる機会が少なく、腹話術を取り巻く古くからの信仰がいまだに存在している。逆説的だが、この歴史が腹話術を使ったセラピーに関係しているように私には思える。

その日、私が話をすると、精神科病院の一人の医師が、どうやって人形に声を「出させる」ことができるのか、詳しく説明してほしいと突っかかってきた。長い説明の後、私は彼にパペットを使ってみないかと誘った。彼はパペットの中に手を入れ、パペットを見てじっと待っていた。何を待っているのかと尋ねると、彼は答えた「彼はあなたに話しかけたのに、なぜ私には話しかけないんだ？」と。

腹話術は時に肯定的、時に否定的な強い反応を引き起こすが、無関心でいる人はいない。アフリカでは、魔法や儀式に関する話題は、教養のある人々の間でさえ、いまだにデリケートなものであり、近づいてはいけないと感じた。そこで私は、これ以上議論するよりも、治療的な方法でパペットを活用できるようスタッフのトレーニングを続けることにした。パペットに慣れ親しむように促され、教師、心理士、看護師、医師たちは、子どもたちとのコミュニケーションの機会を得たことを理解し始めた。

私自身がアフリカで入院した子どもたちと接した中で、最も印象に残っているのは、全身に火傷を負った6歳のケニアの少年である。言葉を発しない、コミュニケーションをとろうとしない彼に業を煮やした病院スタッフが、私に面会を求めてきた。チコと一緒に病室に入ったとき、私は寝たきりの少年の冷たい視線から逃れることができなかった。チコは少年の気持ちが徐々に高まっていくのを意識しているかのように、ゆっくりとベッドに近づいていった。チコが少年の手をそっと撫でると、まず目が反応した。そして少年の手はチコの手に伸び、自分とよく似た点滴を指で触り、次にチコのパジャマを触った。母親に促され、少年は立ち上がった。彼はチコを抱きしめた。まだ無言だったが、その顔には興味と好奇心が表れていた。医療スタッフは、チコに反応する患者の姿を見て喜んだ。

他の子どもたちがベッドを取り囲み始め、スタッフも何人かいた。誰かが歌うことを提案し、チコはライオンキングの「アクナ・マタタ」を歌い始めた。やがてベッドの周りの全員が歌い、踊り始めた（主に肩を動かして）。少年は部屋の熱気に興奮していた。私が一週間一緒に働いていた医師や看護師たちは、病院の壁の中でこのようなお祝いができることに驚いていた。

治療的腹話術は、またしても文化と信念を超えたのである。帰国後、私はアフリカの知人たちと連絡を取り続けた。そして実際、教育者たちはパペット療法を続けている。

2011年3月11日前夜 日本の津波

テレビに映し出された日本の津波の恐ろしい映像に、私の全身に衝撃が走った。原教授と池田氏にメールで連絡を取り、この災害が日本人にとっていかに圧倒的なものであるか、そして新しい日が来るたびに、過ぎ去った日の悲劇がさらに大きくなっていることを知った。私たちは毎日のように連絡を取り合い、さらに原教授からは、トラウマに対処するための実践的なアドバイスを求められた。トラウマについては、私たちイスラエル人は不幸にも甚大な経験をしてきた。

当時私は母の看病をしており、それは母が亡くなるまで続き、さらに数カ月が過ぎた。その間、私は原教授に人形やパペットを使った治療プログラムを構築したイスラエルの心理学者二人に連絡を取るよう勧めたが、原教授は日本社会への理解が必須だと主張し、”あなたは私たちにとって日本人です。それに、地震の余震が続いても対処できるでしょう”と言った。

イスラエル外務省は私の旅に資金を提供し、日本語の公式通訳者を同行させることを決定した。原教授はプログラム全体を計画し、私はワークショップを開いたり、津波の被災地を訪れて、子どもや大人、医療従事者たちの対処法を見せてもらうことができた。

私はイスラエルに戻り、8ヵ月後、今度は外傷後（ポスト・トラウマ）プログラムの立ち上げを手伝うため、日本から2度目の招待を受けた。今回は、シュナイダー医療センターの同僚で、トラウマ治療に豊富な経験を持つ女性が同行してくれた。この旅は今までで一番心ゆさぶられるものになるだろう。被災地の子どもたちとの活動の出発点とするために、私たちは200体以上の人形を持ってイスラエルを出発した。津波に襲われた地域の学校でワークショップを開き、教育者、医師、看護師を指導し、私たちが去った後も活動を続けられるように努めた。私たちが滞在中、日本を揺るがす余震が2回発生し、そのうちの1回は、私が滞在した26階建てのホテルをトランプの家のように揺らした。



ある学校で、私はチョコを大勢の子どもたちに紹介した。チョコは、自分もひどいトラウマを抱えて生きてきたこと、自分の気持ちを友達と話すのが楽になることを説明した。自分の気持ちを言葉にすることで、気持ちが楽になるのだと。（これは日本で伝えた中心的なメッセージだった。友人や愛する人に感情や経験を言葉で表現することの大切さである。）そして子どもたちに人形を配ると、興奮は頂点に達する。子どもたちは口を開き、笑い、おしゃべりする。感情を素直にオープンに表現することを促す私たちの方法が有効であると、職員たちに証明することができた。

チコは次に、子どもたち全員で繰り返せるような感情表現を教えてくれる人がいないか、子どもたちに尋ねた。一人の女の子が前に出て、「津波が怖かった」と言った。チコは子どもたち全員に、彼女の言葉を繰り返すように頼んだ。子どもたちは最初は静かに。二度目は言葉が大きく響き、三度目は大声で叫んだ。日本社会では、感情を表現することはあまり一般的ではない。特に恐れを表現することは難しい。感情をむき出しにすることに慣れているイスラエル人の私たちでさえ、この時の状況に打ちのめされた。特に、勇敢にも自分の気持ちを声に出して表現したこの少女には畏敬の念を抱く。そして私たちは、私たちに温かい愛情を示し、私たちの熱意に触れてとても喜んでいる子どもたちと別れるのが辛かった。子どもたちは列をなして、私たちとパペットの手に触って別れを惜しんでくれた。



私たちが感情を表現するように促し、子どもたちがこれほど強く反応したことに、学校のスタッフはとても驚いた。私たちが帰った後も、教育者たちがそこに癒しの力のあることを本当に理解し、このセラピーを続けてくれることを私は願った。



このワークショップに参加していた一人の校長が、津波で完全に破壊されたこの地域にある彼の学校に私たちを連れて行くことを強く希望した。彼は、震災時、できるだけ多くの教師と生徒を屋上に集め、ヘリコプターで安全な場所まで運ぶ手助けをしたことを話してくれた。彼は自分が経験したトラウマの大きさを理解しているのだろうか。今までにこの経験を誰かに話したことがあったのだろうか。学校の通りの反対側には墓地があるが、土でできた仏陀の童子像が手つかずのまま残っている以外は、そこも破壊されている。自然の強大な力の前では、私たちがいかにかちっぽけで取るに足らない存在であるかをはっきりと感じ、失われたもの、そして壊滅的な人的被害に対する深い痛みを感じた。

翌日、私たちは津波で深刻な被害を受けた家族、教育関係者、セラピストたちの前に立った。原教授とともに、私たちは日本の腹話術師と一緒にエンターテインメント・パフォーマンスをすることにした。観客の親たちは、イスラエルでは戦争やテロ攻撃の状況にどのように対処しているのかなど、多くの質問を投げかけてきた。

原教授は私たちへの感動的な別れの挨拶で、私たちが日本の聴衆に、トラウマ後の対処法として感情を表現することの重要性を教えてくれたと力強く証言してくれた。イスラエル社会ではごく当たり前のことが、日本社会で新しい考え方として切り拓いたのだ。



ダニエラ・ハダシーについて

演劇・教育学修士、演劇療法修士のダニエラ・ハダシーは、腹話術師として20年間舞台に立っていた。10年前、彼女は治療の場を求めて舞台を捨てた。現在は、テルアビブにあるシュナイダー小児医療センターの腫瘍科と移植科で子どもたちと治療腹話術をしている。それ以前は、他の病院で精神科の子どもたちを診ていた。医師、心理学者、ソーシャルワーカー、教育者の会議で講演。イスラエル外務省の特使として、ケニア、エチオピア、日本、インドなどの国々を訪れ、トラウマ症例に対する治療的腹話術をテーマに講演している。

注釈として

東義也（日本パペットセラピー学会理事長）

この度、本学会の名誉会員ダニエラ・ハダシー氏のブログを翻訳・掲載できましたこと嬉しく思います。ハダシーさんのホームページに、パペットセラピーの大事な考え方や方法について、また、私たちの学会活動についても触れられていましたので、いつか翻訳して学会員の皆さんと共有したいと願っていたからです。

彼女は、2003年、アメリカのラスベガスで開かれた国際腹話術大会で池田武志名誉理事長（日本腹話術師協会, JVA 代表）と出会います。その後、2007年、池田氏より日本パペットセラピー学会（JPTA）を立ち上げたばかりの原美智子初代理事長を紹介されます。そして、同年、記念すべき学会第1回大会（2007）のメインスピーカーとして招待されたのでした。つまり学会設立以来、私たちの学会に関心を持ってくださり、また、交流を続けてくださいました。文中にもあったように、彼女はテルアビブ大学で演劇を学んでいたときに、日本文化に触れ、能や歌舞伎、文楽について学んでいたということですので、さらに身近に感じる存在ではないでしょうか。

東日本大震災の時は何回となく駆けつけてくださいましたし、2023年の来日の時は、東京、群馬、神奈川、仙台、山梨の5か所で講演会・ワークショップを行っていただきました。ウクライナから避難してきた子どもたちのトラウマのケアについての話は貴重だったと思います。

今後も本学会との交流が深まり、また、彼女の働きから多くを学べることを願っております。

以下、文中にあったダニエラさんの活動についての文献などです。参考になさってください。

- ・ 江川久美子(2007)「日本パペットセラピー学会第1回大会報告」パペットセラピー第1巻創刊号、p.37-41。
- ・ 原美智子、マスキット・ショハット、ダニエラ・ハダシー、千葉俊一、高村豊(2012)「被災地小学校におけるイスラエルシュナイダー小児医療センター方式のパペットセラピーの実践」パペットセラピー第6巻1号、p.20-26。第10巻増刊号『パペットセラピー入門』（2017）にも短縮・改編されたものが掲載、p.147-152。
- ・ 原美智子(2016)「日本パペットセラピー学会の被災地支援報告」パペットセラピー第10巻1号、p.50-55。第10巻増刊号『パペットセラピー入門』（2017）にも短縮・改編されたものが掲載、p.142-146。
- ・ ダニエラ・ハダシー(Daniela Hadasy)HP <https://www.daniela-hadasy.com/>
- ・ マリヤ・ゴレヴィッチ(Maria Gurevich)HP <https://www.mariadolls.com/>